

分科会 1

ブラジル人コミュニティとの 教育における連携

発表者：金城 ジゼレ（静岡文化芸術大学生）
フジタアルジェノ（Portal Mie社長）
山野上 麻衣（元浜松カナリーニョ教室指導員）
進行：坂本 久海子（NPO法人愛伝舎代表）
北脇 保之（東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター長）



発表内容

フジタアルジェノ

多くのブラジル人は日本の生活事情がわからない

2年前からウェブサイト「Portal Mie」をつくり、在住ブラジル人コミュニティのイベントなどの情報を発信している。日本に住んでいるブラジル人たちは、日本の生活やルールについて教わる機会がないため、実際に何か行動しようとしてもできないという現実がある。私自身も来日後工場勤務し始めたとき、派遣会社の担当者からは「現場監督の指示通りに働いてくれ」と言われただけであった。現在約32万人のブラジル人が日本に住んでいるが、その多くが日本語を習っていない。彼らが日本語を習得したら、現在地域で起きている問題の半分は解決できると思う。なぜなら言葉の習得を通じて日本の文化や習慣、伝統を知り、日本のルールを守るようになるからだ。

ブラジル教育省によると現在日本にあるブラジル人学校数は110校であり、中学生以下のブラジル人児童生徒は約3万人いる。これまで数多くのブラジル人学校を見てきたが日本語を教えている学校は少なかった。これらの学校が日本語をきちんと教えたら、子どもたちは将来日本語に不自由せず生活できるようになる。滋賀県近江八幡市にあるEscola Latino（エスコラ・ラチーノ、ラテン学校）では様々なレベルで日本語教育に取り組んでいる。この学校の先生は、「問題は両親に教育を考えるゆとりがあまりない。親たちは子どもたちの勉強をあまり心配しておらず、子どもたちに十分なサポートがなされていない。」と語っていた。その原因はおそらくブラジル人たちの生活に余裕がないことや、親自身が日本語が出来ないことに恥ずかしさを感じていることにあると思う。

ウェブサイト日本語や日本文化を紹介

また日本に住むブラジル人は日本文化を知り、理解したほうがよい。日本人の生活習慣は長い歴史から生まれたものであり、それが少しでもわかればルールを守るようになる。そうした思いがあって、私は日本文化と日本語を紹介するウェブサイト「Portal Mie」を立ち上げた。

サイトでは日本の歴史、伝統文化、宗教を紹介する他、ひらがな、カタカナ、漢字の書き方、読み方、発音をポルトガル語で紹介している。また侍、忍者、芸者のような名前は知っていても意味は知らないような用語の説明や、日本の有名人、スポーツ選手、最近の流行、料理のレシピなど生活に身近な情報も取り上げている。

今回は時間の都合上不就学の子どもや日本の学校への適応、就職の準備といったことには触れられないが、このフォーラムで子ども達の将来について話すことができ、ブラジル人を代表して感謝する。

*Portal Mieは右のサイトからご覧になれます。【<http://www.portalmie.com/>】

志望校合格までの道のり

2歳3ヶ月で両親と共に来日した。当時日本に住むブラジル人は極めて少なく、私は浜松市立の保育園に入園した。幼少時に来日したので日本語に難しさを感じた覚えはなく、他の日本人の子ども達と一緒に小学校へ入学し、5年生の5月末まで通った。その後、両親が帰国を考えていたため浜松市にあるブラジル人学校に編入した。当時基本的なポルトガル語は家で少し勉強していたが、学校の勉強についていけるほどのレベルではなかったので1年生から勉強し始めた。そこでは早く学校に慣れるようにブラジル人学校の先生たちが私の能力に合わせて支援してくれて、また両親もずっと支えてくれたので4年間でだいぶポルトガル語が上達した。ところが、2004年になって帰国の予定がなくなった。将来日本に残るつもりだったためブラジル人学校でそのまま続けるよりも日本の学校で日本の教育を受ける方がよいと考え、日本の中学校に編入した。今度は日本語の勉強と教科学習をする必要があったため、2004年の5月から私の家の近くにあったカナリーニョ教室に通い始めた。そこで本日の発表者でもある山野上先生に出会い、日本の高校の仕組みや中学校の勉強についてもご指導頂いた。当時の私には志望校がすでにあり、中学校の先生に申し出たら「君じゃ無理なのではないか」と言われた。日本の学校に編入直後であるため能力的に無理だろうということで定時制などをすすめられた。しかしどうしても志望校に行きたいと言うと山野上先生が「じゃあ頑張ろう」と言って応援してくださり、母も父も「やりたいことがあるなら頑張るなさい」と言ってくれた。それで一生懸命に勉強に取り組むことができた。入試にも合格でき、行きたかった高校に行けたのでとても良かった。

子どもを支える人たちが必要である

現在日本にはたくさんの外国人の子ども達が生活しているが勉強面で親も含めて支えてくれる人が本当に少ないと思う。支えてくれる人が少ないから勉強にあまり興味がないという状態の子どもが多い。私の場合は周りに支えてくれる人たちがたくさんいたので頑張れた。現在浜松市にも支援員や教育サポーターと呼ばれる方たちがいるが、彼らは学校での通訳を中心にしており、子供たちや保護者に何が問題なのか問いかけるまではできていない。今後は人材育成システムを作り上げ、そうした専門家を育てるとよい。また、支援に頼るだけでなく私たち自身も教育についてより関心をもって取り組まなければいけない。ブラジル人の保護者を含め、子どもたちは「自分は今何が必要なのか」ということに向き合っていくべきである。自分が追い求めれば必ず手に入ることはたくさんある。わからないからといって諦めないで、情報を追い求めて欲しい。

山野上麻衣**「いっしょに社会をつくるということ」**

今日は浜松市の元カナリーニョ教室の指導員という立場で、話をする。カナリーニョ教室は今もうないが、そのときの実践をもとに「いっしょに社会をつくるということ」という小テーマを設定した。今教え子の話を聞いて胸がいっぱいだ。

最初に確認をしておくが、日本人の間では「ブラジル人」とひとまとまりとして考えがちだが、日本人が一人一人違うようにブラジル人も一人一人違うことを前提として話したい。

情報不足から生まれる誤解

「ブラジル人は教育に関心がない」と言われることが非常に多いが、私自身の経験からそれは必ずしも事実ではないと思う。問題はブラジル人は日本の教育制度、教育事情がわからないことにある。例えば日本には落第制度がないが、そのまま高校に行こうと思ったら、突然中学3年の終わりに高校入試という高い壁がある。ブラジルでは逆で、落第制度は小学校の時からあるが、高校入試はない。この部分はかなり理解を妨げている。

通訳・翻訳のあり方を問い直す

こうした問題に対応するためにたとえば現在浜松市では教育委員会で外国人のための就学ガイダンスを行っている。そして外国人児童生徒就学支援員や就学サポーターが通訳、親との連絡、文書の翻訳、TT授業などを行っている。こうした取り組みは集住都市の自治体であれば多く見られると思うが、「質や量が十分であるか」ということを指摘したい。

翻訳においては日本人向けの文書をただ翻訳しただけでは十分に内容が伝わらない。たとえば警報が出ている場合、学校が休みになるというお知らせの文。日本人であれば、「7時の時点で暴風警報が出ていれば休み」と書いてあれば、それは7時前のNHKの気象情報を見ればいとわかるが、そもそもほとんどのブラジル人はそういう発想につながらないし、仮にニュースを見ても漢字だけで出される警報の種類を見分けることは難しい。どのように情報を伝えるか考える必要がある。また逆に外国人だからといって情報を制限してしまうことも問題だ。「外国人だから高校には行かないだろう」、「進学情報は定時制の話だけしておけばよいだろう」という「外国人だから〜だろう」という前提で情報が出されるケースがある。これは、いま隣にいるジゼレが実際に言われてきたことだ。ジゼレ本人はあまり言わなかったが、編入先の中学校に挨拶に行ったときに、教頭先生から、本人のことをなにも知らないうちにまず「定時制だって無理だね」と言われた。こうした日本人側からの一方的な判断は結局子どもの可能性を摘んでしまうことになる。

カナリーニョでの実践からわかったこと

「顔の見えない定住化」という言葉がある。定住化が進むといわれている一方で、長い間日本にいても、その地域の一員として顔が見えるようにならないという状況をさす。その原因になるのは、一般的には「派遣会社」と呼ばれる業務請負会社による雇用形態や社会構造である。派遣会社を介して来日する外国人の方の多くは常に雇用が不安定な状態にある。私がカナリーニョで教えていた時も、「お父さんがクビになった」という話は日常茶飯事だった。仕事を休んだせいでクビになるのが怖くて三者面談に行けないという保護者を責めることができるだろうか。こうした保護者の立たされている状況を知らないと「ブラジル人が悪い」とか「ブラジル人は教育に関心がない」という一言で片付けられてしまう。カナリーニョ教室はそうした状況の中でどうやって保護者の方に教育に関わってもらえるかを一つのテーマにしていた。

そのため土曜日地域の中で教室を開講していた。そうすることで、親から学校についての相談を受けたり、子どもの勉強の様子を見てもらったり、親が教育に関わりやすい環境を作った。保護者会も行い、多くの人が参加しやすい時間帯を工夫したり、クリスマス会など保護者みんなで楽しめることを行ったり、保護者同士の関係づくりのきっかけも作ってきた。このときに、これらの行事を成功させられたのは、ブラジル人の指導員の力によるところが大きかった。この経験から、バイリンガルの指導員が一方的な通訳ではなく、問題解決に向けて相談者と対等な関係を持つことが重要であることがわかった。また普段忙しい親がいつでも連絡が取れるように、指導員が各教室用の携帯電話を常にもっており、平日の遅い時間や土日でも連絡がとれるようにしていた。

こうした活動に取り組むにあたり、学力を保障する強い理念は必要だが、同時に柔軟に対応していくことも重要である。ひらがなが全て正しい書き順で書けるようになるまでは次のステップには進めない、といった決まったやり方にこだわるのではなく、その子どもの現状、未来、生活環境、学力等様々な要素を総合的に考えた上で対応することが大切である。また支援者、被支援者の上下関係の構造、一方的な支援に陥らないように、「お互いに伝え合うための多言語化」という視点も大事だと考える。一方的に支援をすることは、結局支援する側・される側という構造を固定化してしまう。

現在様々な地域でブラジル人たちが動いており、コミュニティの力も着実に育っている。そうした方達とどのように一緒に考えていくかが課題になる。一つの学校、一つの市の教育委員会、一つのボランティアグループという組織に閉じこもらずに、つながりあいながら一緒に子どもたちの未来を考えていきたい。私が関わっているグループのポルトガル語での合言葉で、「Juntos faremos a diferença」があるが、これは若干意訳もあるが、日本語では「いっしょにここからかえていこう」と訳している。皆さんとつながりあえるような一日にしたいと思っている。

ディスカッション

ブラジル人が日本語を学ぶためにはどうすればよいか。

フジタ：ブラジル人の滞在期間は2、3年から10年、15年と幅があるが、彼らの多くは日本の生活に慣れていない。日本の習慣を覚えていない。日本人の考えがわからない。だから間違っただけをやってしまう。「皆さん、日本語を覚えましょう」というキャンペーンを新聞、雑誌、サイト、テレビを使って伝えていきたい。

坂本：実際ブラジル人が日本語を学ぼうとしたり、教材を求める時にどうすればよいのかは知っているのか。

フジタ：残念ながらブラジル人学校では余り教えていないので、知らない人が多いと思う。子どもの中には言葉がわからなくても仕事はできると思っている子もいるので、何とか学校にいるうちに日本語を覚えさせたほうがよい。

日本の社会や制度に求めることは何か。

金城：親以外に、制度などについて説明してくれる人の存在が重要である。ブラジル人が情報を追い求めていないこともあるが、そこで支えてくれる人、何がわからないのかを聞いてくれる人、情報を提供してくれる人たちを増やすことが大切である。通訳だけに終わらず、高校制度や日本の制度について熟知している人材を育成するシステムがあったらよい。

坂本：外国人の子供たちやその保護者にはどんな支援があれば子供の教育を保障できるのか。

山野上：外国人だから進学しないという偏見を捨て去り、外国人にも学力を保障するという前提に立つことが大切である。日本人社会とブラジル人社会双方でお互いにわかっていること、わかっていないことの情報量や程度が異なっている。そうしたところをうまくつなげられる立場の人が必要である。

ブラジル人コミュニティと日本社会の連携はどうしたら作れるか。

北脇：ブラジル人コミュニティと言われているが、一つのまとまったコミュニティと言えるかどうか。ブラジル人コミュニティ全体と連携をとりたいと思ったとき誰にどう話をすれば協力関係がつけられるのか。またこの連携とれる可能性はあるか。

フジタ：コミュニティと連携をとることは非常に難しい。ブラジル人は雑誌やテレビ、サイトを見ているので、そうしたメディアを活用してはどうか。

山野上：コミュニティはとても扱いが難しい言葉である。たくさん住んでいてもコミュニティといえないエリアもある。地域コミュニティを作るのは難しいが、子供を仲介としたコミュニティはつくりやすい。ブラジル人学校でも日本の学校でも学校が頑張ると良いコミュニティが生まれる。浜松では保護者会でほぼ全員の外国人が参加してくれる学校もある。ただ、なかなか学校の力だけでは難しいところもある。それらの地域は外部組織とつながりあいながら、コミュニティをつくっていくという発想でやっていくとよい。



質疑応答

- 日本語指導を必要とする子供たちの数に対して彼らの母語ができる教師数が不足している。教員免許取得は大変なので、例えばポルトガル語もブラジル社会も知っている方が講習を受け、学校現場の先生のお手伝いをするというシステムを構築する等、より多くの人に指導に関わってもらえるシステムを考えていきたい。(大学教員)

北 脇：外国人の子どもに教育を保障していくために社会として取り組んでいくことも大事だが、同時に政策的なアプローチを確立して政治行政という場で取り組んでいくことも鍵を握っている。外国人児童生徒への教育は日本にとっても政策の重要な一分野であることをはっきり認識し、それに必要な政策を実施していくことが大事である。これらが前進していけば一人一人の先生では解決できないこともやりやすくなっていく。一人の努力でできないことが全体の制度や政策、システムで後押しされる可能性もある。

坂 本：三重県では「多文化共生を考える議員の会」が立ち上がり、国会議員、県議員、市議員32名が会員になっている。皆さん問題意識を持った方達で、外国人のニーズ、学校の先生が困っている状況を知りたいと感じている。私たちは学校内で話すだけではなく社会に発信する必要がある。またメディアを使ってもっと情報を流し社会を動かしていくと考えていきたい。

○本校ではブラジル人の相談員がいるが、学校に慣れたころに帰国や家庭の事情で変わってしまう。根本的な原因として給与待遇や一年契約で先の保障がないということがある。時間をかけて一つのものを積み上げられるような職場環境であれば、発展的なことも行える。二つの文化を知っている人間が両者をつなげていかなければいけないと思うが、何かうまくいくような手立てはあるか。(小学校教諭)

山野上：あまり良いとはいえない待遇やものが言いにくい職場環境のもとモチベーションを維持しながら長期で取り組むのは大変である。大切なのはプロとして尊重される職場づくりである。待遇面も改善されなければいけないが、「所詮下っ端だろう」という目線の中で活動するのと自分自身で考えて行動できる職場とは違う。カナリーニョを紹介するときにバイリンガル・バイカルチュラルという表現を使っている。二つの言語を使える場、二つの文化が共存する場で文化間の力関係をどう読み解いていくのか。日本人が無意識のうちに下に見ている部分について意識を変えていく必要がある。

○ブラジル人の親たちは経済的な理由から教育に関して腰が上がらない場合が多い。日本の企業の待遇や、移民になりえない問題、理由はあると思うが、何か展望はあるか。(大学非常勤講師)

山野上：お金の問題はついて回るが、高校入学をすれば、たとえ途中で退学してもやり直しがきく。一番つらいのは中学校で退学して16歳でやり直したいと思ったら数少ないエリアにしか存在しない夜間中学校でしかやり直す方法がないことだ。日本で高校を出ても結局あまり良い仕事に就けないことも問題だ。こうした状況でモチベーションを維持しながら勉強していくことは難しく、どうせ効果が上がらない教育のためにお金を出すなんて、という発想につながる部分もある。高校を出たことがその子にとってプラスになっていく社会をつくっていかねばいけない。

坂 本：日本人の「教育が大事だ」という価値観とブラジル人の教育に対する価値観で異なる部分がある。日本で将来暮らすために教育は大事だというメッセージを伝えていく必要がある。今日本に働きに来ているブラジル人は日本での仕事は工場しかないと思っている。そのため、工場がだめでも別の仕事があるという選択肢、次の仕事への準備のための教育だということを伝える必要がある。鈴鹿市では外国人の子どもの高校進学を90%以上にするという目標があり、今年83%だった。教育委員会が中心となって外国人の子どもへの教育を権利として保障するために指針を今作成中である。日系人の中で高校に行こうというムードがでてきて、小学校の保護者会で高校に行かせたいという人も多くなっている。また9月に就職マッチングフェアを行う。人手が足りなくて困っている企業に対して正規採用で高卒の日系人の子どもたちを採用してほしいという趣旨で準備している。